

## 「心の花」新・百人一首 黒岩剛仁

今月と来月、「心の花 新・百人一首」が前後編に分けて五十人ずつ掲載される。創刊一〇〇年記念号（一九九八年六月号）以来の百人一首である。前回は、記念号の企画の一つとして、前半五十首を佐佐木幸綱、後半五十首を俵万智が担当し、安政四年生まれの三浦守治から昭和四七年生まれの横山未来子、丁田隆（丁田は既に退会してしまったが）までが掲載されている。

百人一首をはじめとするアンソロジーを編むに当たっては、百人が選べばそれぞれ百通りの選び方があるわけで、この人が入っている人が入っていないなどと議論百出となるのが常である。そこで、今回の百人一首に関する裏話を記しておきたいと思う。

黒岩剛仁、田中拓也、清水あかね、佐佐木定綱の四名で作業を始めたのだが、百人選出のベースとなる案は、田中、清水の二人がまず作成してくれた。田中案は、心の花賞や年間選者賞を網羅した、現在活躍中の人たちに重心を置いた案。それに対して、清水案は、「心の花」草創期の近代歌人を入れたつつ、現在の若い歌人にもスポットを当てるという案だった。この二案を四人で共有し、メールで意見を交換しつつ絞り込んでいった。最終的には、主宰である佐佐木幸綱の意見を仰ぎながら黒岩が百人を決定した。その過程で、前川佐美雄や斎藤史が入っているのだから、福島泰

樹を入れるか、など悩ましい点がいくつも生じた。幸綱からは、鶴見和子やネーダー・コールン靖子など、いわば「心の花」の特色を広げる存在であった人たちに目配りを、とアドバイスを受けた。決定した百人の各一首の選出及びコメントは、先の四人に加え、青山仁、梅原ひろみ、加古陽、河野千絵、服部崇、原ナオ、御手洗靖大の十一名で分担した。分担に当たっては、佐佐木家の人たちを定綱に、石川一成や今泉進などの教員歌人を高校教師である田中に、竹山広や馬場昭徳は長崎人脈で河野になど、書き手として相応しい（読者が読みたいと思うだろう）配慮を施したつもりである。

こうして掲載に至った百人一首（今月は前半の五十首だが）、如何だろうか。例えば川田順。御手洗は敢えて有名歌である老いらくの恋にまつわる歌や、立山の歌ではなく、へ紫禁城を仰ぎて行けば陽は澄めり一線の上に次の門次の門へを選び、その視点やリズムに注目している。また、木下利玄。梅原は「見よ」との結句の命令形に引き込まれるようにへこの花は受胎のすみじところなり雌蕊の根もとのふくらみを見よへを選び、「対象に宿る命の描写に迫力と優しさ」を読む。一方、服部は前川佐美雄に関して、やっぱりというへ春がすみいよ濃くなる真昼間のなにも見えねば大和と思へへを選択し、自分なりの鑑賞を試みる。保坂耕人についても、田中は代表作へ放念のかなたに浮かぶ雲ひとつ 甲斐に生まれて甲斐に死ぬべきへ掲げ、保坂の人生を語る。いずれも読み応えのあるコメントだと思う。

というように、今月と来月、百人それぞれの一首とそれに加えられた各担当者のコメントを味わって頂けると幸いである。